

子どもたちのことばの学びの深まりに資する 大学と附属学校との連携国語科授業研究のあり方

研究代表者：和歌山大学教育学部 丸山 範高

共同研究者：附属小学校 宮脇 隼

1. 研究の目的と方法

本研究の目的は、子どもたちのことばの学びの深まりに資する国語科授業実践のために、大学と附属学校とのどのような連携のあり方が望ましいかを検討することにある。そこで、共同研究者が実践する小学校国語科授業を大学教員が観察するとともに、研究的協議を重ねることで、①大学教員が小学校国語科授業研究で果たすべき役割や、②小学校教員が教員養成に提供できる経験的知見の内容について検討した。なお、研究的協議においては、子どもたちのことばの学びの事実を根拠とした対話を行いつつ、単元計画や教材分析のあり方・授業展開方法など授業づくり全般わたる教師の経験的知見の解明を目指した。

2. 活動の概要

2-1. 授業観察・研究協議①

【実施時期】 2022年6月

【対象児童】 小学校6年

【教材】（「私と本」および星野道夫「森へ」光村図書『国語六創造』pp.78-91.）

【授業概要】

・（前時の復習）説明文教材「森へ」に掲載された写真のうち、「自然の力強さ」を表している写真を選び、その理由を確認した。

・（本時の課題を知る）教材「森へ」の中から「自然の力強さ」を感じる言葉を探すとともに、理由を考える。

・以後、児童2名の司会により授業が展開された。

・本時の学習内容について個別作業・交流活動を行った後、学級全体で意見を交流した。

・「自然の力強さ」を感じる言葉として、「見上げるような巨木や、その間にびっしりとおいしげる樹木が、ぼくがこの森に入ることをこぼんでいるようでした。」(p.85.)「サケが森を作る」(p.90.)「年老いて死んでしまった倒木が、新しい木々を育てたのです。」(p.90.)

「森はさまざまな物語を聞かせてくれるようでした。」(p.91.)等の表現が示された。

・それぞれの言葉を選んだ理由については、「命の連鎖」「自然が終わらず続いている／回っている」「自然の格好よさが表れている」等の発言があった。

・（本時のふりかえり）前時に学んだ写真と本時で学んだ言葉（文）とのつながりを意識しながら学習し得たことを記述した。

【研究的協議】

・説明文教材「森へ」について、段落ごと・場面ごとに順次読み解くのではなく、教科書p.82.に示されたブックトークの枠組み（写真と言葉双方について特定の内容 [=自然の力強さ] に沿って読み進める）を使って読解した。段落ごとに読解する従来の方法と同様の学習成果を期待できると考えている。

・過去の授業（文学教材「帰り道」や説明文教材「時計の時間と心の時間」）においても、

段落ごとに読解する従来の方法ではなく、比喩など、書き手の表現の工夫を手がかりとして教材を読み深める実践を重ねてきている。「読むこと」領域の授業では、スキル・目的を意識し、部分的ではなく教材の全体を俯瞰的に読むことが重要であると考えているからである。

・複式学級を担任した経験もあり、子ども同士の交流を中心に授業することを常に意識している。本時の交流活動では、一人ひとりの子どもの自分の考えの定着を目指した。交流活動を取り入れる場合は、その都度、ねらいを明確にしている。また、司会役の子どもにも交流パターンの選択を委ねることも多いが、意図を持って交流パターンを選択するよう指導している。

・本時の実践の反省点としては、「自然の力強さ」を感じる言葉の選択意図・理由について、子どもたち同士で、もっと言葉を尽くし語り合う必要があったと思われる。また、他者の意見を引き受けて学びを広げ深めるという意味での交流が少なかったように思われる。

2-2. 授業観察・研究協議②

【実施時期】 2022年10月

【対象児童】 小学校6年

【教材】 (宮沢賢治「やまなし」光村図書『国語六創造』pp.104-114.)

【授業概要】

- ・(本時の課題を知る)「どうして「五月」と「十二月」に場面を分けたのか。」
- ・以後、児童2名の司会により授業が展開された。
- ・ベン図を利用し、「五月」と「十二月」それぞれに関する内容と、両者の共通点を記述する(個別学習→交流〈グループ・全体〉)。「かわせみ」「やまなし」といった「五月」と「十二月」それぞれの場面で登場する事物を挙げるとともに、「どちらも幻灯」といった2場面に共通する内容について、種々に意見が示された。
- ・「どうして「五月」と「十二月」に場面を分けたのか。」意見をまとめる(個別学習→交流〈グループ・全体〉)。ここでは、「かにの子どもたちが成長する姿を描いてハッピーエンドにしたかった」という趣旨の発言などが示された。

・ふり返りの記述

【研究的協議】

・本時冒頭で学習課題の一部を修正するなど教師が介入し過ぎたことが残念だった。子どもに司会を任せ、子どもたちの発言の展開により、作品の読みを形成させたいという思いがあるからである。

⇒教師の解釈の押しつけを避け、子ども自身の読みを形成させる授業展開は重要である。

しかしながら、学習課題(発問)の設定段階から授業展開に至るまですべてを子どもに委ねたのでは、「本実践の主張点」に記載されている「本文を根拠にして」や「作者の伝えたいこと」や「自己の考えを形成する」における質的な充実が期待できないのではないか。教師の介入により、子どもたちの学習の質を高めていくことも必要である。

・「本実践の主張点」である、比喩や繰り返しなどレトリックをふまえた解釈(子どもの発言)が少なかったことが残念である。

⇒本時の課題のように作品のマクロな読みをする場合には、比喩など語レベルのレトリックと直接的に結びつけることは難しいのではないか。確かに、レトリックをふまえた子どもの発言は本時ではあまり見られなかったが、「五月」と「十二月」それぞれの場面の共通性と相違性について十分吟味できていたので一定の学習成果を導くことができたのではないか。

・文学作品の読みに関わる学習の意義を【他者性の涵養】にあるとするならば、子どもたちが身にまわっているであろう既有の価値観（成長・ハッピーエンドなど）を揺さぶるような読みを取り入れ、読みの複線化を試みてもよいのではないか。時間とともにかにかの子どもたちが成長するというストーリーに回収されない読み広げこそが、豊かなことばの学びにつながる。なお、かにかの子どもたちが成長するというストーリーで読んだ子どもたちは教科書 p. 110. 1. 8. 「かにかの子どもらはもうよほど大きくなり」に引きずられ過ぎているようにも思われる。かにかの子どもたちの描写を俯瞰し、かにかを取り巻くその他の生物・植物との関係を読み取ることも必要であると考えられる。

3. 研究の成果と課題

本研究では、国語科授業を研究する小学校教員と国語科教育を専門とする大学教員とで、子どもたちのことばの学びの深まりに資する国語科授業のあり方について協議を重ねてきた。その結果、次の通り、小学校教員と大学教員とが果たすそれぞれの役割についての指針を得ることができた。

①大学教員が小学校国語科授業研究で果たすべき役割

「言葉による見方・考え方」（小・中・高校学習指導要領国語：目標の一部）を重視する国語科授業においては、子どもたちのことばの学習の広がり深まりを確かなものにできたかどうか問われる。それは、教師の解釈を無批判に受容することでも、既有の認識の枠組みで安易なことばの学びを遂行することでもない。そうした状況の中で大学教員に求められる役割の1つは、授業展開においてこぼれ落ちそうな子どもの発言に着目し、その子どもの発言を取り上げることで教材世界がいかにかにか深く広く読めるのか、あるいは、子どもたちのことば認識がどう高まのかなどについて、学習の道筋を実践者に示すことにあると考える。

②小学校教員が教員養成に提供できる経験的知見

国語科教材文の読み方には多種多様な理論が存在するため、教員養成課程に在籍する学生たちは、種々の理論を断片的な知識として吸収しがちである。しかしながら、実践者である小学校教員によって、教室の子どもたちの学びに必然となる読み方やそれに基づいた授業展開の具体像が示されることで、学生たちは、理論と子どもたちの学びとのつながりを意識するよう仕向けられるであろう。そして、国語科授業に関わる種々の理論は、それを知識として持っているだけでは不十分であり、子どもたちの学習状況と照応させながら必然性のある理論を取捨選択し実践として結実させることが必要であるという認識を持つに至ると考える。